

万葉集 1328 番歌の「事なくは」の解釈について

竹生 政資*

An Interpretation of the Third Phrase of the 1328th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU

要 旨

万葉集 1328 番歌「膝に伏す 玉の小琴の 事なくは はなはだここだ 我恋ひめやも」は日本琴に寄せた譬喩歌である。通説では「膝の上に横たわる玉の小琴のように、事がなければ、甚だしく多く私は恋い思おうか」のように現代語訳されている。しかし、この現代語訳からは何のメッセージも伝わってこない。第三句「事なくは」の「事なし」を「平穩無事である」や「婚姻妨害がない」のように解する注釈書もあるが、それでも歌の意図は伝わってこない。また、この歌は「譬喩歌」に分類されているが、いったい何の譬喩なのか、この点についても通説は納得のいく説明ができていない。本論文では、特にこの歌の第三句「事なくは」の解釈に焦点をあて、この歌に込められた譬喩内容を解き明かすことを試みる。

1. はじめに

万葉集巻七には「譬喩歌」に分類された歌が 108 首収録されている。本論文で取り上げる 1328 番歌もその中の一つである。題詞によると「日本琴（やまとごと）」に寄せて詠まれた譬喩歌となっている。したがって、この歌を理解するためには、まず歌の表向きの意味を理解した上で、次に譬喩内容を読み解く必要がある。しかし、上の要旨でも述べたように、通説による解釈はこの二つの点とも不十分である。本論文の目的は、この二つの点についてできるだけ納得のいく解釈を提案することである。まず歌の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本に従って掲載することから始めよう[1]。

07/1328 膝に伏す 玉の小琴の 事なくは はなはだここだ 我恋ひめやも
【原文】 伏膝 玉之小琴之 事無者 甚幾許 吾将恋也毛

次に、先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている訓読文、現代語訳、注釈を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。

*佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)
公開鍵指紋: 11C0 DBB6 369C DB72 DD3A B122 EF6B 5B5E B99A C2E7

① 新日本古典文学大系^[1]

【訓読文】膝に伏す 玉のをごと小琴の 事なくは はなはだここだ 我あれ恋ひめやも

【現代語訳】膝の上に横たわる玉の小琴のように、事がなければ、甚だしく多く私は恋い思おうか。

【注釈】「日本琴」、既出（八一〇前文）。「倭琴」（一一二九）。「和琴（わごん）」とも言う。「玉の小琴」の「玉」は美称。「小琴の事なくは」と同音の序詞になる。「事なくは」の「事」はどのような事態か、不明。「はなはだここだ」は、「ここだはなはだ」（二四〇〇）と言った例もある。「ここだ」、既出（二二〇・二三〇・六八九・一一八〇など）。

② 新編日本古典文学全集^[2]

【訓読文】膝に伏す 玉のをごと小琴の 事なくは いたくここだく 我あれ恋ひめやも

【現代語訳】膝に置く 玉の小琴の ことがなければ ひどくこんなに 恋しく思おうか

【注釈】膝に伏す玉の小琴の——古代の和琴は一般に小型であったらしく、静岡市登呂遺跡出土の和琴は長さ四〇センチ、中央部の幅八センチで、また前橋市出土の和琴弹奏男子埴輪も肩幅の約二倍の長さの和琴を膝に載せ両手で掻き鳴らしている。玉ノは美称。以上、同音によって「事」を起す序。○事なくは——事ナシは平穩無事の意。この「事」は婚姻妨害などの事態をさす。反実仮想的內容。（著者注）前橋市出土の和琴弹奏男子埴輪の挿絵は本論文の最後のページに示した。

③ 講談社文庫（中西進）^[3]

【訓読文】膝におく 玉のをごと小琴の 事なくは いとここだくは われ恋ひめやも

【現代語訳】膝にのせる美しい小琴、事が何もなくして、こんなにひどく恋することがあろうか。

【注釈】膝におく——フスの訓は「伏す」（他動詞）が下二段で、不可。○玉の小琴——コトの音を続ける。事は支障。○やも——強い否定を伴う疑問。

④ 万葉集註釈（澤瀉久孝）^[4]

【訓読文】膝に伏す 玉の小琴の 事無くは 甚だここだ 吾恋ひめやも

【現代語訳】膝の上にのせて弾く美しい琴、その「こと」といふ名の、事が無く、何の障りも無かつたならば、こんなにひどくあの人を恋ひする事があろうか。

【注釈】膝に伏す玉の小琴の——琴は膝に載せて弾いたので「膝に伏す」と云つた。「玉の」は美称である。この二句はコトをくりかへした序として「事」につづく。

事無くは——無事に、故障なくば。

甚だここだ——旧訓イトカクバカリを代匠記「コ、タクハト読ベキカ」といひ、古義に「ココダハナハダ極太甚」（十一・二四〇〇）の例により「ハナハダコ、ダと訓べし」と云つた。「甚」はイトとも訓まれてゐるが、「ハナハダキ甚多毛 フラスアメユキ不零雨故」（一三七〇）、「ハナハダキ甚毛 ヨフクテナユキ夜深勿行」（十・二三三六）などハナハダと訓んだ例もあるのでここも古義に従ふ。いろいろ障る事などがあるのでこんなにひどく恋しく思はざるを得ない、といふのである。

【考】古今六帖（五「琴」）に下の句「いとかくばかり我こひむかも」とある。

⑤ 日本古典文学大系^[5]

【訓読文】膝に伏す 玉のをごと小琴の 事なくは いとここだくに われ恋ひめやも

【現代語訳】何事もないなら何でこんなに私があなたを恋するものか。（妨げられるからこそ一層あ

なたが恋しい。)

【注釈】膝に伏す——膝の上におく。当時の琴は、膝の上に置いて弾いた。○玉の小琴の——ここま
で第三句にかかる序。琴と事との同音でかかる。○事なくは——何事もないのなら。実際にはいろい
ろと障りが多いのである。○いとここだくに——こんなにひどく。

上に示した五つの先行研究を見ると、注釈書により初句と第四句の訓読文に違いが見られる。初句
に関して言えば、注釈書③は「膝に置く」と訓むが、それ以外はすべて「膝に伏す」と訓んでいる。
また第四句に関しては、①と④は「はなはだここだ」、②は「いたくここだく」、③は「いとここだく
は」、⑤は「いとここだくに」と訓んでいる。このように訓読文にはかなりの違いが見られるが、この
違いはあくまでも訓み方に関するものであり、語句の意味に関しては本質的な違いはなく、いずれの
注釈書も歌全体の解釈はほぼ同じ内容になっている。

次の第 2 節では、これら五つの先行研究の問題点を検討し、続く第 3 節でこれらの問題点を解決で
きる新たな解釈を提案する。

2. 先行研究における問題点

前節に示した先行研究には少なくとも三つの問題点がある。まず第一に、この歌は「譬喩歌」に分
類された歌であるのに、その比喩内容について納得のいく説明がない点である。実際、前節の五つの
注釈書はいずれも譬喩内容について言及していない。もっとも、譬喩内容を理解するためには、まず
歌の表向きの意味を正しく理解する必要があるが、従来の解釈はこの表向きの意味さえ十分に理解し
ているとは言い難い。

第二の問題点は、第三句「事なくは」の「事」の具体的な内容が不明なことである。注釈書①は「事
なくは」の「事」はどのような事態か、不明」とコメントしている。一方、②、③、④、⑤は「事な
し」を「平穩無事」の意味に解している。しかし、単に「平穩無事」というだけでは漠然としすぎて
具体的なイメージが湧いてこない。歌の意図も伝わってこない。もし「事なし」を「平穩無事」の意
味だとすると、この歌の骨子は「平穩無事でないからこそ、これほどひどく恋しく思われることだ」
となるが、これでは何を言おうとしているのか理解できない。この点に関して、⑤はこの歌の骨子を
「妨げられるからこそ一層あなたが恋しい」と解しているが（④もこれに近い）、これだと暗に「あ
なたが一層恋しくなるよう二人の仲をもっともっと妨害して欲しい」と言っていることになり、万葉
人の感性に合わない。ちなみに、②は「事」を具体的に「婚姻妨害などの事態をさす」とコメントし
ている。

比較のため、今問題の 1328 番歌と同じ結句「我れ恋ひめやも」の例を一つ示す(全部で 17 首ある)。

05/0858 若鮎釣る 松浦の川の 川なみの 並にし思はば 我れ恋ひめやも

この歌の大意は「もしあなたを普通程度に思うのであれば、あなたを恋しく思うだろうか... 思わな
いだろう（この上なく思うからこそ恋しく思うのだ）」であり、歌の意図は明確である。したがって、
今問題の 1328 番歌の場合にも、もし正しい解釈をするならば、上の 858 番歌と同じように歌の意図
が明確に理解できるはずである。

第三の問題点として、前節に示した五つの注釈書はいずれも、「琴」と「事」が同音であることを

理由に、歌の前半部「膝に伏す玉の小琴の」は第三句「事なくは」の「事」を導く序詞だと解している。しかし、このような解釈には疑問がある。なぜならば、もし「琴」が単に「事」を導く形式的な序詞であるならば、どうしてこの歌の題詞に「寄日本琴」とあるのだろうか。わざわざこのような題詞を付けているということは、この歌の「琴」は単なる形式的なものではなく、むしろこの歌の重要なキーワードだと考えるべきではなかろうか。

以上見てきたように、前節に示した先行研究(①から⑤)には少なくとも三つの問題点があることがわかった。次節ではこれらの問題点を解決できる新たな解釈を提案する。

3. 万葉集 1328 番歌の新しい解釈

この節ではまず、新しい解釈結果を示し、その後にそれぞれの根拠を個別に示していくことにしよう。まず 1328 番歌の原文、訓読、直訳、意識を示す。

【原文】伏膝 玉之小琴之 事無者 甚幾許 吾将恋也毛

【訓読】膝に伏す 玉の小琴の 殊なくは はなはだここだ 我恋ひめやも

【直訳】膝の上の玉の小琴が、もし格別でないならば、私はこれほどひどく恋しい思いをするだろうか。

【意識】(表向きの意味) 膝の上の玉の小琴が、もし「平凡」な音色しか出さない琴であるならば、私はこれほどひどくこの小琴を恋しく思ったりするだろうか... 特別にすばらしい音色を出す小琴だからこそ、これほど恋しく思うのだ。

(譬喩の意味) 私の愛する妹は、膝の上に横たわっている玉の小琴のように、普通の女性たちとは違って「殊に」すばらしい。だからこそ、これほどひどく妹が恋しく思われることだ。

ここに示した新しい解釈のポイントは、第三句の原文「事」を「殊」の意に解する点である。すなわち、「ことなし」を通説のように「平穩無事である」の意に解するのではなく、「殊にすぐれているところがない＝平凡である」と解するのである。「平穩無事である」も「平凡である」も語源的には同じであるが、前者はポジティブな意味をもつ表現であるのに対して、後者はネガティブな意味合いで用いられることが多い。例えば、天候などについては、台風や大雨や早魃などの特別な異変が起これば「平穩無事である」ことが望ましいが、人間の能力や容姿などについては周りの人たちよりも(プラス方向に)際立っていることが望ましい。したがって、天候や船旅などの文脈で「ことなし」という語が用いられた場合は「平穩無事である」というポジティブな意味になるが、人間の能力・容姿や楽器の音色などについて「ことなし」と言われた場合には「平凡である」というネガティブな意味になる。今問題の 1328 番歌の場合には「琴」という楽器について「ことなし」という表現が用いられているから、ここの「ことなし」は「平凡な音色である」というネガティブな意味になる。

なお、「ことなし」を「殊にすぐれているところがない＝平凡である」と解する根拠は、「ことなし」の「こと」に「殊」の意味があることによる。現代語の「こと」に「殊」の意味があることは、「ことにすばらしい」のように「ことに＝殊に」という表現があることから明らかだが、万葉集にも次の例がある(カッコ内は原文)。

07/1314 つるはみ 椽の 解き洗ひ衣の 怪しくも ことに着欲しき(殊欲服) この夕かも

この歌の第三句は「格別に着たいと思う（この夕べだなあ）」という意味である。

最後に、1328 番歌の譬喩内容について考えよう。この歌の題詞には「寄日本琴」とあるだけで、作者やその性別は不明であるが、この歌が万葉集巻七の「譬喩歌」に分類されていることから、何らかの譬喩がこの歌に込められていることは確実である。問題はその譬喩内容であるが、この節の最初に示した意識の中では、この歌の作者は男で、小琴はその男の恋人の譬喩と解している。このような解釈の根拠として以下の三つをあげることができる。

第一の根拠は、万葉集 810 番歌の題詞にもう一つの「日本琴」の例が登場することである。この題詞は、大伴旅人が藤原房前に日本琴を贈るために付けた長い書簡からなり、内容はおおむね次のようなものである[6]。

旅人の夢の中に琴が「娘子」となって現れ、「私は元は遠い島の梧桐（あおぎり＝青桐）でしたが、寿命が尽きて空しく朽ち果てるのを心配していましたところ、たまたま良匠に会い『小琴』にしてみました。琴の質も音色もよくありませんが、『君子の左琴』になれればと願っています」と言って次の歌を詠む。

05/0810 いかにあらむ 日の時にかも 音知らむ 人の膝の上 我が枕かむ

これに対して旅人が次の歌で答える。

05/0811 言問はぬ 木にはありとも うるはしき 君が手馴れの 琴にしあるべし

すると夢の中の「娘子」が厚く感謝する。その後、旅人が夢から覚め、夢の出来事を書簡にして日本琴に付けて房前に贈るという内容である。

この話には、今問題の 1328 番歌の譬喩内容を考える上で参考になる三つのヒントが含まれている。一つは、「日本琴」が「小琴」とも呼ばれていること。二つ目は、「日本琴」が女性（今の例では「娘子」）に譬えられていること。三つ目は、「日本琴」を弾くのは「男」であること（今の例では藤原房前）。この三つのヒントを念頭におき、あらためて 1328 番歌を見ると、題詞には「日本琴」とあり、歌の第二句ではこれが「小琴」と表現されており、さらにこの歌は「譬喩歌」とされているから、この歌の「小琴」はおそらく女性の譬喩であろう。

第二の根拠は、万葉集の歌の中だけでなく題詞や左注などに登場するすべての「琴」の例を調べてみると、琴の弾き手にはすべて「男」が想定されていることである（例外として 3886 番歌に「琴弾きの蟹」の例が一つだけある）。このことは、逆に弾かれる方の「琴」には「女性」が想定されていることを意味し、例えば、次の例に見るように、当時の人々が琴に対して女性のイメージをもっていたことがわかる（この歌の題詞には「詠倭琴」とある）。

07/1129 琴取れば 嘆き先立つ けだしくも 琴の下樋に 妻や隠れる

最後に、第三の根拠として、新編日本古典文学全集（第 1 節の②）の挿絵にあるように（次図を参照）、和琴を膝に載せ両手で掻き鳴らしている男子像の埴輪（前橋市出土の和琴弹奏男子埴輪）が出土していることである。ただし、この埴輪は古墳時代のものであり、万葉集の歌が詠まれた時代とは異なるけれども、この埴輪像からも、1328 番歌の作者は「男」であり、自分の愛する女性を「小琴」に

譬えているように思われる。



4. おわりに

本論文では、万葉集1328番歌の特に第三句「事なくは」の解釈に焦点をあて、歌全体の意味が通るような解釈を試みた。通説では「事なし」を「平穩無事である」や「婚姻妨害がない」などの意味に解するが、これでは歌の意図がよく理解できない。本論文では「事なし」を「殊なし」の意味に解し、特にこの歌では「琴の音色が平凡である」という意味に解することにより、この歌の意図がよく理解できることを示した。また、歌に込められた譬喩として、第二句の「玉の小琴」を作者（男）の恋人の比喩とする解釈を示した。本論文で示したような解釈が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

参考文献

- [1] 「萬葉集 二」、新日本古典文学大系、岩波書店、p.174、2000 年。
- [2] 「萬葉集②」、新編日本古典文学全集、小学館、pp253-254、1995 年。
- [3] 「万葉集 原文付全訳注 (二)」、中西進、講談社文庫、p.135、1980 年。
- [4] 「萬葉集注釋 卷第七」、澤瀉久孝、中央公論社、p294、1960 年。
- [5] 「萬葉集 二」、日本古典文学大系、岩波書店、pp.250-251、1959 年。
- [6] 「萬葉集 一」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp.458-461、pp.528-529、1999 年。